

森 一久 (原稿)

2004 N-20 発表 1/3

昨日は、この由緒深い テイジヨコの名所をご案内頂き、
また、夜には、すばらしい 歓迎の宴を催して頂き、日本側
N-20のメンバーなどに同行の皆様は大変感謝しております

本日は、EJF スクールさんと ビュガ CEA長官の日暖かい
お言葉と貴国の最近の状況を伺い、我々今回のN-20
の成功を保証する知識と雰囲気を与えて頂いたことを
心強く思っております。
「全く皆勤」
「歴史」といふのは、長年長者が
語られたこと、おえんの命に

丁度N-20の第11回目、いわば第2ラウンドの始まりで
ありますので、私は、日仏原子力協力の歴史を半短かに
振り返り、またN-20を始めた「初心」を確認させて
頂き、開会のご挨拶に代えたいと存じます。

日仏原子力協力の始まりは、42年前、1962年、東京で
開催された日仏原子力技術会議で、主催は、フランス
側 ATEN (Association Tech Energie Nuclear)、
日本側は JEIF でした。CEAの Director General の
モーリス・パスカル、ATEN ランベルトニ会長ら53名で ①
4日間にわたり、主として貴国の状況を懇切に説明 ①

して頂きました。その時まで、「高速炉」について、

バッドリエス博士がすばらしい発表をされています。①
(Vandryes)

その後の協力の発展は、OHPでご覧のように、第2回会議
パリなどの交流、1970年には日仏共同のウラン探鉱
ニジエール、日本最初の ~~日本として~~ 東海再処理工場が
(日本として初めて成功)

カンゴバン社の設計・建設管理のもとに行われ、70年には
天然ウランの最初の輸入、74年ウラン濃縮契約、77年
には再処理委託契約が結ばれました。78年のアメリカが
政策を180度転換して、カーター大統領のPu利用禁止
政策を打ち出したが、それを先取りして、日本の原子力
開発が独自性を確保する上で大きな意味を持った
のであります。

そればかりでなく、その後、原子力を核燃料サイクルを
含め、全面的に開発して、自国のエネルギー供給に
据える国は、フランスと日本だけとなる状況がはきり、
私は、フランス側と相談して、両国の政策の技術の中心
的人物が、非公式に定期的に意見交換する会を設ける
こととしたのが、1990年です。

その問題認識ルールのようなものは、②、③のとおり
です。

④ 開催一覧

⑤ 第1回 サクレー

⑤' "

⑥ 日本の第1回 奈良

⑥' "

⑦ 1~3回 カールさん、村田さん

⑧ 地図

最後の地図、こんなに多くの場所。今後の
開催場所を考える材料！

今後 N-20 の意義は、両国の協力促進のみで
なく、世界の原子力政策を大きく動かして行く
ような一矢器 Pu 問題や ~~GM~~ GMA のような一
重大なテーマの意見交換で、ますます大きくなると思
います。